

山崎俊夫『童貞』論

―「美しき弱者」の「性」と「生」

山田 健一朗

一・はじめに

本稿は、日本近代文学における半陰陽の表象について、山崎俊夫（一八九一―一九七九）の小説『童貞』を通じて分析するものである。

一九九〇年代、社会学・歴史学の分野におけるジェンダー・セクシュアリティ研究の中で、セクシュアルマイノリティをめぐる言説分析が盛んとなった。同性愛をはじめ、女装・サディズム・マゾヒズム・買春問題・性同一性障害など、これまで真正面から取り上げられることの少なかったトピックが重要視された。近代文学研究の領域でもその影響により、多くの研究者によって多角的に作品が分析され、一定の成果を上げてきた。

しかし、セクシュアリティの諸問題を研究する中で半陰陽（インターセックス）の問題は、なぜか取り上げられる機会に恵まれなかったように思われる。^(注1)

半陰陽は、古来（ふたなり）などという蔑称で呼ばれ

てきたことが示すように、男でも女でもない「性の境界」の中で生きることを強いられてきた存在であった。そして、後述するように、近代社会は半陰陽を単に「異常」のもとに一括りにし、その存在を片隅へと追いやり、巧みに隠蔽してきた。そのことは、現代に至るまで半陰陽に関する医学的・社会的観点に基づいた実態調査が行われる機会が極めて少ないことや、近年クローズアップされる^(注2)つつある性同一性障害と混同して捉える人々がままいるということにも象徴されている。

つまり、彼らは古来セクシュアルマイノリティとしてその存在を認知されていながら、彼らの抱える精神的・肉体的、そして社会的な苦悩はまさしく「黙殺」されたまま、顧みられることはなかったのである。半陰陽は、まさしくセジュイックの^(注3)いう、社会の「クローゼット」の中に軟禁されたままなのだ。

だからこそ、「性」の境界にいる彼らが、社会の中で

いかにして生きてきたのか、あるいは自己の存在理由をいかにして見出してきたのか、改めて検証することが課題として残されているように思う。そして、その課題を検証するためには、まず何よりも半陰陽者の表象を分析することが必要であると考える。本稿は、そうした問題意識に基づき、『童貞』の分析を通じて、日本近代文学における半陰陽者の表象の一端を解明したい。

なお、本稿は、セクシュアリティと近代文学の関係を捉える以外にも一つの目論見がある。それは山崎俊夫作品の持つ文学的価値の再考である。

山崎俊夫は、文壇においてもはや完全に忘れ去られた存在となってしまう。彼は慶應義塾で永井荷風に師事し、雑誌『三田文学』を中心に作品を発表したものの、昭和の初めに役者へと転向し、完全に筆を折ってしまった。

山崎の作品は、美少年のナイーブな心情と美少年同士の恋を濃密なタッチで描いた点に特徴がある。そのため大衆的な支持は得られなかったものの、コアなファンが少なからず存在した。その代表的な人物の一人が菊池寛であった。菊池は、山崎が筆を折った後も、彼に文壇復帰を呼びかけるエッセーを『三田文学』に寄稿しているほどの山崎俊夫作品を支持していた。^(注1)

また、現代でも山崎俊夫作品を再評価する動きがなかったわけではない。たとえばフランス文学者生田耕作は、山崎作品を「近代日本が生んだ、世界に類を見ない独特の文学世界」であると絶賛したうえで、「永井荷風も稲垣足穂も彼のことを書いている。ところが『童貞』という作品集一冊出したきり、完全にわすれられてしまった」と嘆いている。^(注2) ちなみに生田は、自ら編集校訂を手掛けて「山崎俊夫作品集(全五巻)」という個人全集まで発刊している。

このように、山崎俊夫作品は長い間文壇から忘れられていただけに、これまでの近代文学にはない価値や意味が隠されているはずだ。『童貞』の分析を通じて、近代文学が半陰陽をどのように描いたのか、その一端を探るとともに、文学とセクシュアリティの連関の新たな視座を見出したい。

二、作られるイメージ——半陰陽のロマン化

さて、物語は大きく二つに分かれる。前半部分では主人公京二自身の肉体をめぐる京二の苦悩と母親との関係が描かれ、後半部分では母親の死後家庭から離され、学校の寄宿舎に一人で預けられた京二のその後が描かれる。

まず注意すべきは、主人公の京二について、本文中に「半陰陽」という語が一度も使われていないことだ。そして不思議なのは、そうであるにもかかわらず、読者には京二が半陰陽と認識できるように描かれている点である。これにはどのような意図が隠されているのか。

そもそも近代日本における半陰陽のイメージとはいかなるものだったのか。本題に入る前に、大まかに概観しておきたい。

須永朝彦によると、日本においては「十世紀以来、半陰陽を（ふたなり）とか（はにわり）と呼んで」その存在を認知していた。その一方で、彼らは「辞書・医学書はもとより」「俗書でも一様に奇形扱い」とされていたのだ^(注6)という。

そうした認識は明治以後も変わらなかった。一応、近代日本では「性欲が研究の対象となり、さまざまな機会に言及」され始めるとともに、「性的欲望」^(注7)「性欲が問題」として浮上し、特権的な位置を占める^(注8)「時代となった」というのが、セクシュアリティをめぐる共通の時代認識である。だが、そうした時代認識の中でも半陰陽は、単なる生理学上の「異常」として一括りにされていた。たとえば、榎保三郎『性欲研究と精神分析学』（大正八年）では、半陰陽を「其の生殖器の男性とも女性とも明らかに区別

するを得ざる」者と定義し、「色情倒錯者」として扱っている^(注9)。また、澤田順次郎は「神秘なる同性愛」（大正九年）の中で、半陰陽を「俗にふたなりと称し、医学上興味あるものにして、之れが原因を究むるには、生物学上の事実に基づかなくてはならぬ」としたうえで、「其の異常なる性質、及び行為は、ややもすれば物議をかもし、又、法律上の問題となることも少なからず」と、異常者として扱っている^(注10)。

このような「半陰陽＝異常」という認識はセクソロジのみならず、文学にも共通してみられる。たとえば『童貞』とほぼ同時期に発表された森鷗外の小説『灰燼』（明治四四〜大正元年）には、半陰陽の相原光太郎という美少年が登場する。彼は「華族の若殿かと思われるような着物を着て」「いつも身綺麗にして」いるが、「籍は牧山の息子の通っている東京中学に置いてあるのに、欠席がちで、成績がひどく悪い」。そのうえ、少女にしつこくつきまとうなど「いろいろな噂」が絶えない不良少年として描かれ、明らかに「悪」のイメージが付与されているのである。

こうしてみると、『童貞』発表当時の半陰陽は異常者・倒錯者として明確に規定されており、歴史的な経緯も考えれば、一般には否定的なイメージで認識されていたと

みていい。

では、『童貞』本文中に「半陰陽」という語が一度も使われていないことには、どのような意図が隠されているのか。京二の造形を手掛かりに考えてみよう。

物語冒頭、京二は「花車な母から腺病質を遺伝せられ」たためか、「あまりに性質が柔順なので、幼児の頃には女の子と間違へられてばかりぬ」る男の子として登場する。そして、彼の肉体については、次のように描かれる。

京二は閉め切つた湯殿の内にたつたひとりであつた。

(中略) 熟しきつた桃の實のやうな両頬をちひさい綺麗な手で、びたびたと叩きながら鏡の面前に立つてゐた。はち切れさうに脹らんだ皮膚は、どこもかも艶やかな膩脂の潤沢を帯びて、見てゐても自分ながらにくすぐつたいほど、女の肉体らしく豊肥に光つて鏡へ写つてゐる。^(注)

この例からもわかるように、京二はまるで「女の肉体」であるかのように描かれ、女性性がことさら強調されている。少なくともここには、右に掲げた「異常」としての半陰陽の面影は感じられない。そのことは、次のような表現からも理解できよう。

京二は鏡の中を恰も不思議でたまらないものでも見るやうに、つくづくと見つめてゐたが、やがてぢりぢりと鏡の表面ににじり寄つた。鏡の中に写つた児の唇を吸うと、死んだ児の唇のやうに冷たくて気が好かつた。

この例における京二は、「鏡の中に写つた」自分を「つくづくとみつめ」、「唇を吸う」とあるようにナルシスト的傾向が顕著であり、「異常」のイメージと明らかな落差がある。

こうしたイメージの落差は、京二は母親から「人の前で裸体になつてはいけない」と常に戒められ、他の兄弟から隔離されて育てられているという設定と深く関係している。実はこの設定こそ、京二が半陰陽であることを暗示しているとともに、それは彼自身が知りえない肉体的(秘密)となつて機能していることをも暗示している。たとえば、次のような部分だ。

人にすぐれて強烈な感受性を持つて生まれた京二は、幼いながらも何故とは知らず、この怪しげないましめをされる毎に、言ひ知れぬ戦慄を禁じえなかつた。

「みんなは何処でも裸体になれるのに、何故自分だ

けがいけないんだらう」

かう自分にも問う人にも尋ねたが、何時も満足な答えを与えられたことがなかった。

このように、京二は、自分の肉体に係る（秘密）の内実を把握しておらず、自分が「男」であることを頑なに信じていることが分かる。そして、やはり、母の戒めが彼の行動と性格に深く影響していることも読み取れる。「人にすぐれて強烈な感受性を持つ」性格である京二であるからこそ、母親の戒めが彼自身のアイデンティティを大きく揺り動かしているのだ。

実はこの点に、京二が「半陰陽」という呼称で呼ばれない理由がよく表れているように思う。

確かに京二は、一読すれば半陰陽であるのかどうかさえ疑わしい。「女の子のような男の子」という中性的な描写が物語っているように、むしろその「美少年」性ともいべき側面が強調されていた。

しかし、当の京二自身は、自らの肉体を「不思議でたまらない」ものと捉えて真剣に悩んでいる。京二の苦悩は本人の「弱さ」として機能しており、物語を通じて一貫して強調されている。そのことが京二の（秘密）の持つ意味の重要性を際立たせている。すると、先に引用し

た京二のナルシスト的行動とは、謎めいた自分自身の肉体を何とか受容しようとする京二自身の苦悩の発露と解釈することができる。つまり、京二の苦悩は、「自分の肉体は一体何なのか」というアイデンティティの問題と結合しており、そのことで物語全体が強い迫真性を帯びている。

すると、「異常」としての半陰陽という近代社会特有の価値観は後退していることが分かる。むしろ「異常」なのか「正常」なのかをめぐって思い悩むセクシュアルマイノリティの苦悩こそが、この物語の主題として焦点化されている。つまり、京二が半陰陽であることをぼかすことで、彼自身のアイデンティティの問題に主題が絞り込まれているのである。したがって、物語全体で執拗なほど悩み苦しむ京二の姿には、すべて必然性がある。彼は自らの肉体の（秘密）の答えを求め、一人煩悶し続けなければならぬ。

ただし、その苦悩が必然性を獲得し、強い迫真性を帯びるには、近代社会が規定してきた「半陰陽≡異常」のイメージを一時的に留保する必要があるのではないか。ゆえに、「半陰陽」という直截的な呼称を避け、婉曲的な表現を多用しているのだと考えられる。そのことが自身の性について苦悩する個人のセクシュアリティの問

題を逆にクローズアップさせている。先に述べた物語全体の迫真性の根源はここにあると考えるべきだろう。すると、京二は、半陰陽に付随しつづける「異常」のイメージを払拭し、その苦悩を体現する、「弱者」として規定される。そこに先の「美少年」性が付け加わることで、彼は、いわば「美しき弱者」としてのイメージを完成させている。

そして、この「美しき弱者」のイメージが、本作品特有のエンタテイメント性を獲得していることを見逃してはならない。古来まとわりつく「半陰陽Ⅱ異常」のイメージを一掃し、逆に彼の妖艶さ、神秘性といった怪しくも魅力ある要素を吹き込もうとしたのではないか。だからこそ、菊池寛や生田耕作のような熱心なファンを獲得しえたのだろう。

ただし、注意したいのは、右に述べた京二のイメージは、半陰陽のロマン化ともいべき現象でもあるということだ。そして、このロマン化現象は、自己の存在意義への疑念に対する返答を容易に見い出せない、近代社会への憔悴と失望の証として逆説的に理解することも可能である。すなわち、京二を「美しき弱者」として描くことは、「半陰陽」であるがゆえに背負わなくてはならない弱者の苦悩を焦点化して描いて見せた反面、その苦悩

を逆に「異常」なものとして断罪する社会の現実をあぶりだしているような気がしてならない。そう考えれば、「半陰陽」の名称を使わないことによって、むしろ「半陰陽」であることの苦悩がより暴力的な形で表象されているとは言えないだろうか。

三．揺れ動く「性」――すがりあう母子とその断絶

次に「美しき弱者」としての京二が抱く苦悩の内実を考える際、見逃せないのは母親と京二の関係である。

「通常、気がつくとわたしたちはすでに何らかの家族や家族的形態の傘の下に入り」、「親や兄弟姉妹との関係やそれから派生する「家族のメタファー」は、私たち自身のセクシュアリティを語る際のキーワードにもなっている」という関礼子の指摘もあるように、家族は人間のセクシュアリティ形成においてとりわけ大きな影響を及ぼす。

先に述べたように、京二は少女のような肉体を持ちながらも、自身の肉体をめぐって激しく苦悩している。それは母親によって常に「人前で裸になつてはならない」という戒めを受け、他の兄弟から引き離され行動を管理されていたからだ。つまり、母親と京二は、京二の肉体の（秘密）を共有しているといえる。

だが、見方を変えれば、京二は常に母親の意思によってその肉体をコントロールされているとも言える。母の戒めを破り他人の前で裸になることは、京二が「異常」であることを自ら暴露することになる。他人と京二が「異常」であることを悟られぬよう、母親は常に京二を戒め、統御し続けていたのだ。それは母の愛情の裏返しとも言えるが、京二の〈秘密〉が露見した時、その関係はもろくも破綻してしまう。たとえば、京二が町子たちと相撲力士の裸体を描いた時の場面を見てみよう。

それは同じ裸体画でありながら、町子達の描いたそれと京二の描いたのとは肉体のある一部にすこし異なつた部分があつた。もしこの裸体画が化粧回しか何かを着けた関取の絵でさへあつたなら、京二はこの悲哀を嘗めずに済んだであつたのかもしれない。不幸にして京二の描いた裸体画は、町子達の苦笑と嘲弄を買わなければならないやうな絵であつた。

この部分は、具体的な説明が全く伴わない抽象的な表現であるにもかかわらず、読者にはその中身が明瞭になつていくという点で、京二の〈秘密〉の本質が最も顕

著に表れている。すなわち京二が半陰陽であることは、当事者である京二だけが知らない公然の秘密となつたのであり、故に彼は、「町子達の苦笑と嘲弄を買わなければならない」のである。

笑われた京二は、「目にいつばい涙をためながら」、「みんなが僕の絵を変だというんだもの、ちつとも違つてやいやしないよねえ」と、母親に救いを求める。問題の裸体画を母親の眼前に突きつけられた母親は、「あまりのことに仰天し」、京二の〈秘密〉が露見したことを悟る。しかし母親は、京二に〈秘密〉の真実を語らず、「泣いている京二の泣き顔をしげしげと見つめ」、「痛いほどきつく頬ずりする」だけなのだ。この一見慈悲深い母親の行動は、他人と「すこし異なつた部分」を持つ京二への憐憫と、そういう肉体をもつ子の母としての負い目とが交錯したものだ。

このように、京二の肉体の〈秘密〉が露見することは、京二と母の〈秘密〉の共有を介した濃密な関係の破綻を意味する。京二と母は、肉体の〈秘密〉という点においてのみつながっていたのであり、京二の肉体の〈秘密〉が露見してしまつた以上、存在理由が失われてしまうのだ。結果的に母は、突然の病死という形で、物語からの強制的な排除を余儀なくされる。

さらに、この母の死の描写にも注意が必要だ。たとえば、死に際して京二に発した言葉を見てみる。

「お母さんだもの赦しておくれだねえ。ああ可哀さうにおまへはなんにも知らない。」

握られてゐた手が慄慄するので京二は伏目になつてゐた顔をあげて母の顔を見ると、なかば閉ぢられた眼にはありありと、哀願の光が漲つてゐた。京二はその晩から葬式のすむ晩まで、母の言葉が気になつて眠られなかつた。

母は息子に許しを乞う一方、最後まで彼の肉体の（秘密）の中身を彼に知らせない。彼女は、死を目前にしても未だに「なんにも知らない」京二の身を案ずる慈悲深い母を演じ続け、同時に（秘密）を隠し続けてきたことに對する許しを請う哀願する母として死んでゆく。つまり、彼女は京二との關係を保持したと思ひ込んだまま、死んでゆくのである。

ただし、右に挙げた部分は、初出掲載時と大きく変更されていることに注意。ここで初出時の叙述を具体的に見てみよう。

「京二や、お前はお母様を赦してお呉れかい。」
母にかう言はれた。

「うん。」

京二はかう言つて何も考へずに頷いた。（中略）

「京二。お前のか、か、か、……」

母の舌はそれつきり動かなくなつてしまつた。（注）

ここでは、母の京二への哀願がより明白に描かれる一方、「京二。お前のか、か、か、……」という台詞が物語るように、京二に何かを伝えようとする様子が描かれている。しかしそれが京二の秘密に関する事なのかどうかは、読者にもわからない。ところがこの場面における母親の言葉は単行本化に際してすべて書き換えられている。すなわち京二が「なんにも知らない」ことを嘆き、真実を語ることは一切ない。つまり、何かを語ろうとする母から、全てを隠したままの母へと書き換えられているのである。

こうした（秘密）をひた隠しに隠す母の態度に對して、京二は自らのアイデンティティに對する疑念をさらに深めてゆくのである。

母は何故に早く自分の事の真実を打ち明けてはくれ

なかつたのだらう。母は何故に何時までも無意味にこの身の秘密を自分に知らせまいとしたのだらう。母が真実に自分を愛してくれるといふのなら、出来るだけ早く知らしてこそくれなくてはならぬ筈だ。いままでそれを知らずに過してきたといふのは、どう考へてみても悔しい。自分にこんな悔しい思ひをさせる母の仕打ちはあまりにも恨めしい。もうこれからは母の言ふことは一切信じまい。母の愛は何といつても受けまい。母は自分の愛し方を誤つた。やはり愛してくれる者より愛してくれない者の方が常に正直なのだ。京二はかうしたやうなことを思ひつづけて、終日茫然としてゐる日が多かつた。

ここには「この身の秘密を自分に知らせまいとした」母の態度への疑念だけではなく、「自分の愛し方を誤つた」母に対する憎悪の念も込められている。同時に、このことは、自らの肉体に関するすべての責任を母親に転嫁せずにはいられない荒んだ心理状態の表明でもある。

その一方、この母への憎悪とは、自分の肉体について何の確証も得られぬまま生きなければならぬ運命を背負つた、一人の人間の切実なる苦悩の体現としても読める。なぜなら、彼は母の死に際し「自分の肉体のあらゆる

る局部をひとつひとつ切り離しては、それに就いて熟考」するが、「どうしても自分が男の児だといふことを、人に打ち消される理由があるとは思へ」ず、一層苦悩を深刻化させているからだ。自分の肉体が「男」として間違つていないということを確かめようとする京二の姿勢には、自分が何者なのかという、自らのアイデンティティをめぐる苦悩が如実に反映されている。そこには、この世に「男女という分離の前提」があり、「男と女どちらかにされてしまう」という近代社会における性をめぐる問題の根深さが提起されているといえよう。^(注15)

母の存在とは、京二の苦悩を増幅させ、その孤独を補強する存在であつたのだ。しかし、その母の死によって彼は、自分の「性」への疑念を晴らすことができず、一人取り残される。自分に秘められた肉体の謎を突き詰めてゆくと、京二の苦悩が、『童貞』の物語の核心となつてることが母との関係の描写からも十分証明されているのである。

四、「弱者」の選択——「クローゼット」の中へ

では、母を失い、〈秘密〉が露見した後、京二は自身の抱く苦悩とどのように対峙していくのか。その点について、物語後半部分の描写から考察してみたい。

母親の死後、京二は突然家族から離されて中学の寄宿舎へと送られ、完全に孤立する。この展開にはやや強引で唐突な印象を受けるが、京二の「弱者」としての孤独という宿命を運命づけるには効果的に作用しているように思える。

その一方、男ばかりの寄宿舎にあつて、京二の「男らしくない」体は常に好奇のまなざしを注がれる。最も典型的なのは入浴だ。「京二には実に混浴といふことに對して、絶対に許さるべからぬ生涯のいましめ」がある以上、風呂に入る際は、「臆病に、耳敏く、微かな人の聲音にも、衣擦れの音にも、胸をどきどき跳らせ」つつ、細心の注意を払わなくてはならない。当然、他の寄宿生は京二に好奇のまなざしを投げかけ、京二が何者なのかを詮索する。

「君、あれは純粹な男性だと思ふかい。あれはね……。」(中略)

「なんかたしかな証拠でもあるのかい。」

「なくつてさ。まづ第一に頭の面積が顔の面積の割合にしてはちひさすぎる。第二にあの瞳には男性の強い光がない。第三に耳朶と指の爪が透き通るやうで綺麗すぎる。それに喉仏がない。その次に肩が撫

肩だ。胸元の脹れているのは乳房がおほきいからだ。おまけに足が内曲ときてゐるから、ほかにもう点のうちどころがないぢやないか。」

この場面では京二の「男らしくない」体の細部が觀察され、それがごと細かに寄宿生の口から生々しく語られている。明らかに「異常」としてのまなざしを投げかけられている。つまり、先に述べたような「半陰陽者≡異常」という世間のイメージだ。ここにおいて京二は、「異常」なものとして社会のなかでも存在価値を問われるとともに、当初作品で抑制したはずの「異常」としての半陰陽の要素が大きく前傾化してくるのである。

とりわけ先に挙げた京二の容姿の「異常」性を列挙する彼らの思想の背景には、当時のセクソロジーの影響もが見て取れる。^(注1)同時にこの觀察からは、京二とは対極にあるマッチョな体、いわば「男らしい」肉体とはどのようなものであったのかという問題が提起されているという意味でも非常に興味深い。^(注2)こうした「異常」なものに對する好奇心は、京二に對する実力行使となつて具現化する。つまり「異常」なものをもまなざす彼らの視点には、「異常」を「正常」と明確に弁別し排除しようとする力学と、逆にそれを欲望によつて支配しようとする力学

という、二重の意味での暴力性・権力性が潜んでいると言える。

では、そうした「正常」な側からのまなざしを被る京二の心理はどのように描かれているのか、次の引用で考えてみる。

京二は手足を蒟蒻のようにぶるぶるとふるわせながら蒲団にすわつた。全身の戦慄が色を失つた唇の上にわなわなと神経痛のように感じ始めた。内股と内股とをあわせてじりじりと汗ばむほどに硬く膝頭を窄めた。腋下と掌には脂のような冷や汗が気味悪く流れ出した。握り締めた手の中にはにちやにちやと湿つた。額から首筋までが熱病人みたように真青になつてきた。

この場面こそ『童貞』の最も象徴的な場面だ。京二が肉体の秘密を力で剥ぎ取られようとする恐怖が、身体の微妙な動きの描写とあいまって、読者に必要以上の切迫感が与えられる。とりわけ擬態語の多用によって、京二の身に迫つた男たちの欲望が実にリアルに描き出されている。そして、そこには身体が拒絶しても、どうすることもできない京二のもどかしさも同時に描き出されている。

る。

こうした京二が肌で感じる恐怖とは、彼が孤独で無抵抗の「美しき弱者」であることを最もよく物語っており、作品の悲劇性を高めている。そのことで彼は、自身の「性」への疑念をより一層先鋭化させてゆくのである。たとえれば次のような部分だ。

京二は姉の化粧箱からこつそり偷んできた懐中鏡を自分の抽斗へ隠しておいて、同室の生徒のゐない折を見ては、時々出してみることを覚えた。自分の容貌といひ姿勢といひ、見れば見るほど男らしくない、華奢な柔和な、そうして何処となく人の感情を惹きつけずにはおかない、強い力の備わつてゐることに自分ながら驚いた。けれどもその着物の下に隠されているある秘密を思い出すと、すぐに慄然として

「おれがこんな顔をしてゐるのはあたりまへだ」
かう呟いてあたりには人はゐなかつたかと目を配つた。

姉から盗んだ手鏡で自分の顔を見た京二は、「男らしくない」自分を自覚し、同時に「何処となく人の感情を惹きつけずにはおかない」魅力のある顔であることも悟

る。「美しき弱者」としての立場を、彼は改めて受容しようとしている。そして、「その着物の下に隠されているある秘密」を思い出して、それをかき消すかのごとく「おれがこんな顔をしてゐるのはあたりまへだ」と力強く言い切っている。この力強い口調には、京二が必死で自分に刻印された（秘密）の呪縛から逃れたいという願望と、男らしくなくても自分は自分でしかないという自己肯定の意識という二重の意味が込められている。それだけにこの台詞のみで用いられている「おれ」という一人称が鮮烈な響きを持ち、京二の切実な心理を描き出しており、京二の運命の悲劇性を高めている。

だが、この悲劇性とは、実は近代社会における「異常」なるものへの暴力的なまなざしと表裏一体である。すると、京二の存在は、逆に近代社会の作り出した価値観の暴力性や欺瞞を照射したものとして理解することも可能である。

そのことは、『童貞』から一年後の大正三年に発表された『夜の鳥』において一層明確化する。^(注18)内容について詳しく論じている余裕はないが、作品冒頭で京二は寄宿舎から自力で逃げ出す。その後とある海軍士官とその姉妹と懇意になるが、その関係も間もなく破綻してしまふ。そして徴兵検査の対象となる二十歳を迎えた京二は自殺

を図るが、それも叶わない。死ぬことすらできない自らの運命を呪いつつも、京二は仕方なく生きることを選択するところで物語は終わっている。

ここで重要なのは、物語終盤で京二が「これから行く末の長いのにせよ、短いのにせよ生きている間は どうせ 明るい世界へ出ることのできない身でありながら、何時までこうした生活をつづけていかなければならないのだらう」と、今後の人生に対する深い憂慮を表明していることだろう。^(注19)孤独の京二に死という選択肢はない。ただ社会に背を向けながら生きていくことのみが残された選択肢だったのだ。

このように、「美しき弱者」としての「性」と「生」とを、孤独の中で背負っていくことを消極的にしか受容できない京二の姿は、「異常」なものとして弁別される側の過敏な心理を如実に反映している。そして、京二の「弱者」としての選択は、実は現代のセクシャルマイノリティが直面している現実的困難と結びつくことに気がつく。すなわち、近代社会が作り出した「異常／正常」のカテゴリーの中で、「正常」の側にいななければ生きていけない現実を証明しているのだ。言い換えれば、彼は一人の「弱者」として、世間一般——「クローゼット」の中に閉じこもることで、ようやく社会の中で生きられるというこ

とでもある。それは「人生の一時期または残りの人生ずつと、あえてクローゼットの中にとどまることを選択するのも、あるいは再びクローゼットの中に戻るといふ選択をするのも、説明のつかないことではない」というセジヴィックの言葉に通じる。⁽¹⁾そう考えれば京二の「性」と「生」とは、単に一人の「弱者」の生き方にとどまらない。近代社会、ひいては現代社会の「性」と「生」をめぐる問題を改めて提示していると言えないか。

五. おわりに

このように『童貞』は、半陰陽者の苦悩を表象した数少ない日本近代文学作品の一つであり、現代社会に通じる普遍性と先駆性を持った小説だと評価することができよう。

ただ、自ら「クローゼット」の中に戻ることを選択した「美しき弱者」の生きざまは、なんとその後味が悪いことは確かだ。そういう意味ではマイノリティが世間一般に対して抱く漠然かつ強烈な厭世意識を主題化した小説だとも言える。そして、そうした厭世意識を抱かせるような社会全体の構造を浮き彫りにしている点も、『童貞』の文学的価値の一つと思われる。

他方、考えてみれば、そうした後味の悪さが描かれ

てしまう点に、文学の持つ力の皮肉があるのだと言える。自らのセクシュアリティの問題に明確な解答を出さないまま「クローゼット」の中に戻る事を選択した京二の生きざまを、社会学・歴史学がセクシュアルマイノリティをめぐる諸問題に対して様々な批判や論点を出してきた経緯を鑑みた時、あまりに悲しい結末ではないからだ。すると逆に、彼らが抱える人生の息苦しさ、切なさを表象することができる力が文学にはあるとも言える。マイノリティの苦悩は、文学を通じて表象されて、はじめて分析されるだけの意味を持ち得るということを、『童貞』は改めて私たちに示しているのかもしれない。

注

(1) 例えば石井達朗は『異装のセクシュアリティ』(新宿書房 二〇〇三(平成一五)年二月)の中で、インドの半陰陽「ヒジュラ」を取り上げているが、同時にドラマグクインの事例も取り上げているように、「女装」などの他のトピックを語る際の事例として限定的に論じられることが多い。

(2) 半陰陽は現在、「性分化障害」・「性発達障害」とも呼ばれる。「性分化障害」とは、「母親と父親から引き継いだ遺伝情報の変異と内分泌変異により、胎児の生殖器

と泌尿器に」起こる障害で、これにより出生時の性別判断が困難となる。また、二次性徴時における発達障害を「性発達障害」と呼び、こうした障害を持つ子どもは半陰陽児（インターセックス・チルドレン）」とも呼ばれている。

(参照) 日本半陰陽協会ホームページ <http://www14.ocn.ne.jp/~pefst/pefst3.html>

(3) イヴ・K・セジヴィック『クローゼットの認識論』(一九九九(平成一一)七月 青土社 十二ページ)

(4) 「山崎俊夫君の事」(『三田文学』一九三七(昭和一二)年八月号)。ここで菊池は山崎について「この三田文学の新進作家で僕が一番好きだったのは山崎俊夫君である。デカダンの『美少年文学である』と述べ、さらに「僕は、過去の文壇生活において、僕の囑望した作家は大抵は世の中へ出ている。ただ、僕がファンだった山崎君だけが、文名を成し得なかったことを残念に思っているのである。」と、文壇から去ったことをしきりに惜しんでいる。

(5) 「サバト館の秘密を明かそう」(『生田耕作発言集成—卓法者の天国』一九九三(平成五)年九月 人文書院 八四ページ)

なお、生田耕作は、このほかにも山崎作品の魅力につ

いて触れている。たとえば、次のような文章。「山崎俊夫の作品について詳しく論じている余裕はないが、わが鏡花と、荷風と、江戸歌舞伎と、そして西欧世紀末文学とを混ぜ合わせ、これを天草切支丹天主堂の地下倉に貯えて醸造した摩訶不思議の美酒とでも喻えようか。」(雑誌『奢瀟都 第二号』一九八六(昭和六一)年九月 一六一ページ)。山崎作品への熱烈な思いが、ここでは吐露されているが、生田自身が個々の山崎俊夫作品について論じたことはほとんどなかった。実際、生田が生前編集し刊行した『山崎俊夫作品集』(全五巻)は、非常に小部数の発行であり、いくら高く彼が山崎を賛美しても、多くの読者を得る可能性は低かったと言わざるを得ない。

(6) 須永朝彦「ふたなりひらの系譜解題 アンドロヂュヌス世界への誘い 読書案内雑記」(『書物の王国—両性具有』一九九九(平成一一)年 国書刊行会 二一七ページ)

(7) 石原千秋「性欲を研究する時代がやってきた」(『百年前の私たち』二〇〇七(平成一九)年三月 講談社現代新書 一一五ページ)

(8) 川村邦光『性家族の誕生—セクシュアリティの近代』(二〇〇四(平成一六)年七月 ちくま学芸文庫 九二ページ)

(9) 榎保三郎『性欲研究と精神分析学』(一九一九(大正八)

年 実業之日本社 一八二ページ)

(10) 澤田順次郎『神秘なる同性愛』(上下合本 一九二〇(大正九)年六月 東京天下堂 九七〜九八ページ)

(11) 森鷗外『灰燼』(ちくま文庫版『森鷗外全集3 灰燼

かのように』一九九五(平成七)年八月) 一八三ページ)

(12) 山崎俊夫『童貞』初出は『三田文学』大正二年五月号。

本文の引用は生田耕作編『山崎俊夫作品集 上巻』(審

瀨都館 一九八六(昭和六二)年九月)によった。

(13) 関礼子『ジェンダーとテキスト生成―師弟物語の変奏』

(『ジェンダーの社会学』岩波書店 一九九五(平成七)

年十月 六一ページ)

(14) 『三田文学』一九一三(大正二)年五月号より引用。

(15) 実際の半陰陽で社会運動家でもある橋本秀雄は、伏見

霊明との対談(『変態(ティア) 入門』二〇〇三(平成

一五)年七月 ちくま文庫)の中で、「いまの社会は女

の価値観と男の価値観しかないじゃないですか」と指

摘し(二〇三ページ)、男女二元論に基づく価値観の中

で半陰陽がいかに孤立しながら生きているかを述べて

いる。

(16) 異常なものを数値化することで客観・固定化しようと

する動きは、たとえば中村古峡編集の雑誌『変態心理』

にも何度も繰り返し掲載された。一例をあげれば菅原

教造「頭蓋骨の興味」(二巻一号)や黒沢良臣「偉人の脳とその重量」(二巻二号)など枚挙にいとまがない。

(17) たとえば「誰も彼も猛々しく筋肉の發育した男の香ひ

がしじゅう毛穴から発散しているやうな、年長者の中

に交つて自分ばかりがあまりに若年であり、あまりに

女々しいのが腹立たしく、みんなの興味を惹く種を自

には何の關係もないやうな気がして、京二はひとりこ

つそり抜けて自分の部屋に戻ってきた。」という部分な

どは、京二の華奢で「女らしい」肉体と著しい対照を

なしている。

(18) 『夜の鳥―童貞後日物語』は『秀才文壇』一九一四(大

正三)年四月号に発表。海軍士官とその姉妹から逃れ、

自殺にも失敗した京二は「いつまでこうした生活をつ

づけていかなければならないのだらうと、また新しい

溜息を」つくどあり、一人で生きなければならぬ彼の

宿命の重圧を描いている。

(19) 『夜の鳥』の本文引用は、生田耕作編『山崎俊夫作品

集 上巻』(審瀨都館 一九八六(昭和六一)年九月)

によった。

(20) 注3前掲書 九八ページ

(やまだ・けんいちろう/名古屋大学大学院博士研究員)